政 治 研 究 結 果 報 告 書

―政治研究助成―

西暦　２０２４　年（令和６年）２月１６日

一般財団法人　櫻　田　會
理事長　　増田　勝彦　殿

研 究 者　早稲田大学政治経済学部教授
尾野　嘉邦

第４１回（令和４年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。
※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入）　Research Theme

移民や難民などに対する有権者の態度に関する研究
Research on People's Attitudes toward Immigrants and Refugees

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250 words **以内）** Abstract (Purpose, Process, Significance)

This research focused on identifying everyday discrimination against immigrants a in Japan, a subject widely acknowledged globally but less examined within the country. The objective was to see whether such discrimination manifests in daily interactions, such as reluctance to sit next to immigrants on public benches. To investigate, the study utilized 72 photographs showing a six-seat bench with two individuals of apparently foreign and Japanese appearance placed in predefined positions. These images were shown to over 3,500 Japanese participants in an online survey, asking them to choose their seating preference in a hypothetical situation akin to waiting for a bus, necessitating a choice between sitting next to a person of Japanese or foreign appearance.

The analysis, based on more than 7,000 responses, uncovered a pronounced preference among Japanese respondents to avoid sitting next to foreign-looking individuals, favoring seats next to Japanese by a significant margin. Notably, this avoidance tendency was even more marked when the foreign-looking individual in the photograph was of South Asian appearance, as opposed to Western appearance, with a 3 to 5 percentage points higher likelihood of choosing seats next to Japanese. These findings suggest the existence of subtle yet pervasive everyday discrimination against immigrants in Japan, potentially contributing to their sense of exclusion.

Future research aims to further explore the underlying reasons for these seating choices and examine the variation in discriminatory behavior among different Japanese demographic groups, providing deeper insights into the social dynamics of discrimination.

※研究の目的・研究方法・意義 （和文 600 字以内）

国連によれば、長期化する内戦や政情不安によって、世界各地で住む場所を追われた人々の数は 5950 万人にも達しており、2015 年以降、シリアをはじめとする中東・アフリカ諸国から大量の難民や移民が欧州に押し寄せた。こうした急激な難民・移民の流入は、難民や移民を襲う事件が発生するなど、欧州において外国人排斥の機運を高めつつある。

日本においても、少子高齢化による労働人口不足もあいまって、中長期にわたって滞在または永住する外国人の数が年々増加しており、その存在感が高まることで、政治の場面でも外国人排斥や差別を煽る動きが見られるようになってきた。

こうした移民に対する差別は世界各国で大きな問題になっており、社会科学の分野ではその検出について多くの研究がなされてきた。差別は特に雇用や住居への入居などの場面において多く研究されてきたが、これら特定の場面だけでなく、日常生活のレベルでも移民が差別に直面していることが指摘されている。

本研究では、まず街中の風景の中で外国人と日本人が存在する場面を映した写真を用いたサーベイ実験を通じて、日常生活における移民に対する差別の存在について検出を試みた。このような差別が生じる状況を探ることにより、移民や難民に対する人々の偏見や態度形成の要因を理解するだけでなく、それらを克服するための条件を見出すことが出来ると考えられる。

※研究経過と結果の概要　（以下の欄に 35 行以内（1500 字程度）にまとめる）

移民や難民に対する様々な差別は各国で大きな問題になっており、その検出について多くの研究がなされてきたが、日本における研究はまだ少数にとどまる。そのため、本研究では、国内外の研究者らの協力を得て、まず日本においても移民に対して日常レベルの差別が存在するのかを検証することを目指した。日常レベルの差別とは、例えば移民がベンチに座っているときに、その隣に座られないとか、なにか物を落としたときに拾ってもらえないといった些細な事象のことを指す。しかしながら、こうした経験が積み重なると、移民個人にとって精神的なダメージを与えることとなるため、深刻な問題である。

日常的な差別が日本で存在するかどうかを検証するために、まずは 6 人掛けのベンチに（特に見かけ上は日本人と認識しにくい）外国籍に見える人物（外国人と呼ぶ）と日本人に見える人物（日本人と呼ぶ）の 2 人を座らせた写真を準備した。ここで、外国人と日本人をランダムに左右からそれぞれ 2 番目の座席に配置した。写真のモデルとして、日本人 2 名の他に、外国人として、西洋系の人物が 2 名、南アジア系の人物が 2 名、の合計 6 名に協力してもらった。なお、2 つの異なるベンチを用意し、それぞれについて合計で 36 パターンの写真が存在する。したがって、実験に用いる写真は全部で 72 枚になる。写真はできるだけ日常風景に近づけつつ、実験には関係のない要素（例えば、モデルの服装など）を揃える必要があり、見かけ上は日本人と認識しにくい複数人のモデルの選定や、ベンチの選定などに多くの時間を費やすこととなった。

そうした写真を準備したうえで、次に、3500 人余りの日本人被験者をオンラインで集めて調査に回答させた。被験者それぞれに対して、36 パターンの中から 1 つの写真を無作為に選んで提示し、バスを待つといった日常生活の場面の中でベンチに座るとして、ベンチのどの場所を選ぶ

かを質問した。写真中のベンチの座席は6席しかないので、被験者は必ず日本人か外国人かのいずれかの横に座ることを迫られる。この実験では、2 つのベンチ写真それぞれについてこの質問しているので、合計 7000 回余りの選択データが集められた。

このデータを分析し、日本人被験者が日常の場面の中で（意識的あるいは無意識的に）外国人の横を避ける傾向があるかどうかを検証した。分析の結果、2 種類のベンチともに、日本人の隣の席を選択する確率が高く、外国人の隣の席と比べて 50 ポイントも上回っていた。さらに外国人の隣の座席を忌避する傾向は、特に提示された写真中の外国人が南アジア系である場合に強く、西洋系の場合よりも 3 から 5 ポイントほど日本人の隣の座席を選ぶ確率が高かった。

このように、日本人被験者たちに何気ない日常生活の中での選択を問うたサーベイ実験の結果、日本においても外国人移民に対する日常的な差別が存在することが明らかになった。こうした結果は、大半の日本人が意識的に外国人を差別したことによって生じたものではないと思われるが、こうした事態が繰り返されれば、移民は日本人に避けられ差別されたという印象を持つことになるだろう。今後の研究では、調査の中で特定の座席を選んだ理由について記述させたテキストデータの分析や、どのような日本人の間でそうした傾向が小さかったのか、あるいは大きかったのかというバリエーションの分析をさらに行うことで、日常の差別が生じる条件について解明していく予定である。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

本研究の研究成果は、今後、国内外の学会（日本政治学会やアメリカ政治学会など）や研究会において発表したのち、学術論文として海外の学術雑誌に投稿する計画である。

〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご留意ください。